

2007 年度プロジェクト発表会実行委員会の活動報告

Report on the Activity of Project Committee in 2007

ネットワーク情報学部 横山 敬之、高橋 和美、上平 崇仁

School of Network and Information Takayuki YOKOYAMA, Kazumi TAKAHASHI, Takahito KAMIHIRA

Keywords : project , presentation , committee

1. プロジェクト発表会とは

専修大学のネットワーク情報学部の学生が大学生活最も濃い1年間を過ごす。それが「プロジェクト」である。

2年次より、「ネットワークシステム」、「コンテンツデザイン」、「情報戦略」、「情報技術創造」の4つのコースに分かれ、各々そのコースに見合った専門知識・技術を習得し、そして3年次になると、「プロジェクト」という授業を履修する。「プロジェクト」では、教授や学生自らが立案した研究テーマ毎に10～20名のグループに分かれ、1年次、2年次で各々が習得したものを活かし、1年間の作品制作及び問題解決に取り組んでいく。

そしてその成果を発表する場、それが「プロジェクト発表会」である。「プロジェクト発表会」は学外にも大きく告知を行うため、学内だけでなく学外の企業の方や卒業生の方、またネットワーク情報学部に入學予定の高校生などが発表を見るために足を運ぶ。そのため発表する3年次の学生はその場であらゆる人に発表することでプレゼンテーション能力やコミュニケーション能力を磨き、自分たちの成果物を見直すきっかけとし、今後の自分たちの成長の糧とする。

これが、「プロジェクト発表会」の概要である。

2. プロジェクト発表会実行委員会とは

プロジェクト発表会は学生を主体に行われ、その主役は発表する3年生である。そして、1年前にプロジェクト発表会を体験した4年生の数名が発表会の準備を行う。また、コンテンツデザインコースの2年生を先生方に紹介していただき、告知用ポスターや当日のパンフレットのような、発表を盛り上げるための資料の制作をしてもらう。この4年生、2年生がプロジェクト発表会実行委員会である。そして2007年度プロジェクト発表会実行委員会は以下のとおりである。

2007 年度プロジェクト発表会実行委員会

4年生	ne160200	横山 敬之 (代表)
	ne160008	佐久間 麻理
	ne160224	永井 千也
	ne160232	山内 賢幸
	ne160251	滝澤 啓
2年生	ne180033	中村 和世
	ne180136	福馬 杏子
	ne180147	鷗沢 まなみ
	ne180154	高橋 和美

3. 実行委員会の活動内容

3.1. 4年生の活動履歴

1. 実行委員の編成

実行委員会の最初の仕事は実行委員を決定することである。実行委員会の代表は教務課によって選ばれ、その依頼を承諾した時点で代表者が決定する。そしてその他の実行委員はその代表者が集めることになる。2年生の人選についてはコンテンツデザインコースを担当している先生方をお願いをして、メンバーを決定することになる。

2. 発表会場の決定

次に行うことは発表会場の決定である。2006年度までは9号館5階のアトリウムとゼミ室で行っていたが、新しく10号館が建設されたこともあって、2007年度は10号館1階のアカデミー・モールとゼミ室で行われた。発表会場の決定に関する詳細は後述することにする。

3. 各プロジェクトの発表場所の決定

発表会場の決定後にすることは、各プロジェクトの発表場所を決定することである。特に10号館1階のゼミ室は8部屋しかないため、ゼミ室を使用するプロジェクトは早く決めなければいけない。2007年度は10月末に各プロジェクトに対して、発表する場所の希望を確認するためのア

ンケートを行った。その結果、21プロジェクトのうち11プロジェクトがゼミ室を希望し、話し合いをしてゼミ室を使用するプロジェクトを決定することになった。その詳細も後述することにする。

4. 大学から貸し出す機材や備品の調査と管理

発表場所の希望を調査すると同時に、どのような機材を使用するのか、またその使用する機材の台数を把握するための調査を行った。大学側からはプロジェクタ、スクリーン、デスクトップパソコンなどを貸し出すことができ、貸し出しを希望するプロジェクトへそれらの機材を割り振らなければならない。しかし各プロジェクトの希望する台数を準備できるとは限らない。台数の関係でプロジェクタやスクリーンは各プロジェクトに1台ずつしか割り当てられず、デスクトップパソコンも5号館のプロジェクトルームで使用されているPCのみである。つまりそれらの機材を複数使用したい場合は各プロジェクトで準備をしてもらうことになる。

プロジェクタやスクリーンには番号が振られており、どのプロジェクトにどの番号のものを割り当てたかを整理しておかなければならない。またデスクトップパソコンに関してはパソコン本体だけでなくディスプレイやキーボードやマウス、そしてそれらをつなぐコード類などあらゆるものを貸し出すことになるため、全てのものに番号を振っておき、紛失や損壊などの際の参考資料になるように整理しておかなければならない。

またノートパソコンの貸し出しは実行委員会からは行わないことにした。各プロジェクトにはプロジェクトPCが1台ずつ貸し出されており、そのほかにパソコンを使用する場合は各プロジェクトで準備するように伝え、その管理には実行委員会は関わらないことにした。

他にも貸し出すものとして大学の備品がある。例えば発表の際に使用する机やイス、ホワイトボードなどを貸し出す。これらもどこのプロジェクトにどの備品をどこからどれだけの数を貸し出すのかなどを整理しておき、片付けなどの際に混乱しないようにしておかなければならない。また、2007年度の発表会では、10号館1階に置かれている丸机やイス、植物などは発表会の際に不必要となったので、会場設営の際に移動させることにした。それらの移動したものは、発表会終了後に全く同じ形に戻さなければならないため、どこに何が置かれていたかを把握しておかなければならなかった。

これらの機材や備品の貸し出しや管理についてはかなりの時間と労力を使い、なおかつミスのないようにしていかなければならないため慎重に事を進めた。何度も教務課と打ち合わせを行うことから、4年生の実行委員はプロジェクトと教務課をつなぐ存在でもあった。

5. 会場の設営

全ての準備が整い、発表会の前日に会場設営が行われた。

この日は金曜日で5限まで授業があるため、18:00以降にしか大がかりな準備をすることはできなかった。しかし実行委員の4年生は17:00ごろからアカデミー・モールの備品(丸机やイス、植物など)を、控え室として確保していた10号館1階の教室に移動させ、その後、机やイス、プロジェクタやスクリーンなど貸し出しするものの配布や、各プロジェクトからの質問に答えるなどの仕事を行った。

会場設営日のスケジュールやルールなどを記載した「発表会マニュアル」を作成し、事前に各プロジェクトには配布していたが、やはりこちらの思ったとおりの流れで作業は進まなかった。しかしそれでも20:00には各プロジェクトは準備を終わらせることができ、翌日の本番を迎えるだけとなった。

6. 発表会当日の仕事

発表会当日は発表会が始まるまでは慌しかったが、発表会が始まると後は定期的に会場を見回ったり、受付で来客に対応したりするなどの仕事のみであった。発表会を実際に行ってみて気づくこと、反省することもあったが、それは実際に発表会を行った3年生が来年の実行委員会となったときに改善してくれると思う。10号館での第1回目の発表会としてはとても良いものになった。

発表会終了後は貸し出したものの回収や、片付け、そして閉会式などで慌しくなり、貸し出した備品が足りなかったり、混在したりして戸惑うこともあったが、なんとか無事発表会を終了することができた。

7. 発表会後の仕事

発表会が終了してしばらくたってもまだいくつか仕事が残っているのが4年生である。紛失したものの行方を調査したり、発表会の様子を撮影した写真を先生方から集めたり、また、来年度の実行委員会のために「プロジェクト発表会実行委員会マニュアル」を作成した。この「プロジェクト発表会実行委員会マニュアル」が来年度の発表会に生かされることだと思う。そして最後の仕事として、「ネットワーク&インフォメーション」にこの活動の報告書を記載することにした。その理由としては、「プロジェクト発表会実行委員会マニュアル」には実行委員会の仕事内容が詳細に書かれているが、あくまでそれは来年度意向の実行委員会に向けてのもので、学生全体に伝わるものではない。そこで誰でも見ることができる「ネットワーク&インフォメーション」に実行委員会がどのような仕事を行ったかということに記載し、最後に実行委員会のコメントをつけることで、来年度以降発表する3年生が少しでも発表会の裏方で誰が動いているかということを知ることになり、なお一層プロジェクト発表会が盛り上がることになればいいと思い記載することにした。

以上が4年生の活動履歴である。その他に4年生が制作したものに以下のようなものがある。

8. Web サイト

発表会を盛り上げるための告知用ポスターや発表会当日のパンフレットなどの制作は2年生の仕事内容となるが、Webサイトの制作だけは毎年4年生が行っている。

2007年度Webサイト



制作者：佐久間 麻理

Webサイトには、プロジェクトの概要や発表するプロジェクトの情報が記載されており、各プロジェクトのWebサイトへリンクさせてある。

9. 5色の垂れ幕

2007年度垂れ幕



制作者：佐久間 麻理

2006年度までは「プロジェクト発表会」と書かれた横断幕のみを使用していたが、2007年度はそれに加えて5色の垂れ幕を作成し、発表会の雰囲気を盛り上げた。

3.2. 2年生の活動履歴

1. 実行委員の編成

2年生の実行委員は4年生とは違い、CDコースの先生

方に紹介をしてもらう形で決定する。先生方に紹介されるだけあって、その2年生のデザインセンスと技術、そして取り組む姿勢は信頼できるものであった。

また毎年2年生の実行委員会は男子が多いが、2007年度は女子4人であった。以下に2年生が制作したものを紹介する。

2. 告知用ポスターの作成

2007年度ポスター



制作者：高橋 和美

＜作成時期＞

11月下旬

＜ポスターサイズ＞

A2

(420mm × 594mm)

＜掲載場所＞

学内の掲示番や、向ヶ丘遊園駅の南口改札の専修大学の掲示板、さらには神田校舎にも貼っていただいた。

ポスターはWebサイトと同様に暖色系をベースとし、発表会の日時と場所、そして会場までのアクセス方法、サイトのURLを記載した。また写真は今年の発表会の写真を使用した。

3. パンフレット

2007年度パンフレット



制作者：鶴沢 まなみ

発表会当日に来客に配るためのパンフレットである。各プロジェクトの発表場所とプロジェクトの紹介文、トイレや休憩所などのアイコン、そしてベストプロジェクトを決定するためのアンケートへリンクしているQRコードなど

を記載。

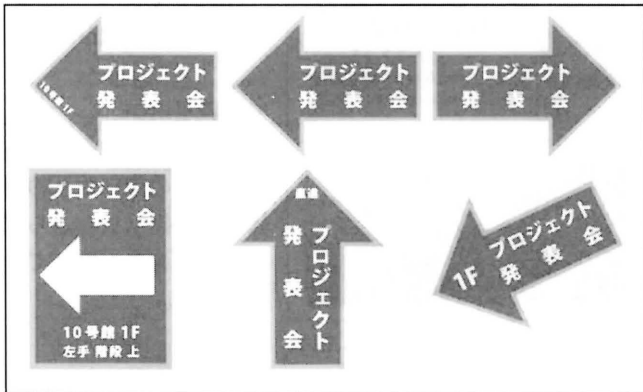
印刷部数が1000枚と多いため、カラー印刷や折るなどのデザインはせず、白黒のA4サイズで作成した。

4. 誘導サインの作成

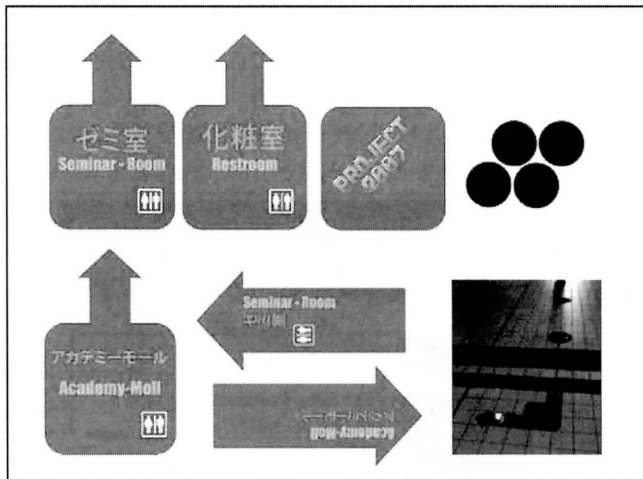
来客を10号館1階の入り口から発表場所までの誘導、アカデミー・モールからゼミ室への誘導、ゼミ室からアカデミー・モールへの誘導など、発表をスムーズに見ることができるように誘導サインの作成を行った。

Webサイトやポスターのように暖色系を用いたかったが、赤や黄色の矢印は危険や注意を促すものになってしまうため、青や緑などを使用した。

2007年度誘導サイン(壁)



2007年度誘導サイン(足元)



制作者：中村 和世、福馬 杏子

5. 会場デザインの工夫

発表会を盛り上げるため、誘導サインの他にアカデミー・モールとゼミ室をつなぐ通路の壁に、各プロジェクトに提出してもらった成果物写真を加工して、「ギャラリー」を作成した。

写真の内容は、「制作物の写真」、「ロゴマーク」、「作業風景」、「集合写真」など様々なものがあったが、それらを

上手く線でつなぐことで通行人の目を引くことができた。2年生によるオリジナル企画である。

2007年度ギャラリー



制作者：中村 和世、福馬 杏子

6. その他の制作物



制作者：中村 和世

立て看板は10号館1階の駅方面出入口と9号館方面出入口の2箇所に設置し、ネームカードはプロジェクト発表会実行委員会用に作成した。

4. プロジェクト発表会会場での実行委員

4.1. 会場設営日



4.2. 発表会当日



インフレットや会場のあちこちに貼ったチラシにサイトへのURLやQRコードを記載し、アンケートの協力を促した。

もう1種類は手書きのアンケートである。学外からの来客の方がわざわざ携帯電話を使ってまでアンケートに協力してもらえないと考え、Webと全く同じ内容を手書きのアンケートにし受付にて配布、回収した。

携帯電話を使ってのアンケートを作成するには時間と労力がかかる。しかし携帯電話でアンケートに協力して下さった方は少なく、8割が手書きのアンケートによるものであった。そのことから来年度以降は手書きのアンケートのみで十分であると考えられる。

・ Web システム制作者：滝澤 啓

<http://www.ne.senshu-u.ac.jp/project2007/vote/>

5. ベストプロジェクトの発表について

プロジェクト発表会では毎年、ご来場して下さった方を対象にアンケートを実施し、好評だった上位3プロジェクトを発表する。それがベストプロジェクトである。

ベストプロジェクトの発表は発表会を締めるためには最適なイベントであり、優勝を目指しモチベーションを高めてきたプロジェクトも少なくない。しかしベストプロジェクトはあくまで結果であり、決して発表会の目的とはいけない。プロジェクト発表会の目的は発表することで新しい情報や発見を得ることである。そのため2007年度はベストプロジェクトの発表は必要かどうかの話し合いも行った。

結局、3年生はベストプロジェクトの発表を楽しみにしていることや、優勝を目的に設定しているプロジェクトもいると考えられ、またベストプロジェクトの発表を行わないことにメリットもないため、2007年度も実施することにした。

しかしベストプロジェクトの決定方法は毎年考えていかなければいけない。2006年度は、「良いと思ったプロジェクトのベスト3を選ぶ」というとてもシンプルなアンケートの内容であった。しかしそれでは成果物だけでなく、飾り付けや見せ方のインパクトによって本当の評価を得られないのではないかと考え、2007年度は以下の3点の項目を挙げた。

- ・ 企画構成が優れていたプロジェクトは？
- ・ プレゼンテーションが優れていたプロジェクトは？
- ・ 最終成果物の完成度が高かったプロジェクトは？

それぞれの項目ごとに最大3プロジェクトずつ選んでもらい、選ばれた数が多い上位プロジェクト3つをベストプロジェクトとすることにした。これにより、より細かく各プロジェクトの評価が得られた。

アンケートの実施には2種類を準備した。1つは、携帯電話を使用してWeb上で投票するというものである。パ

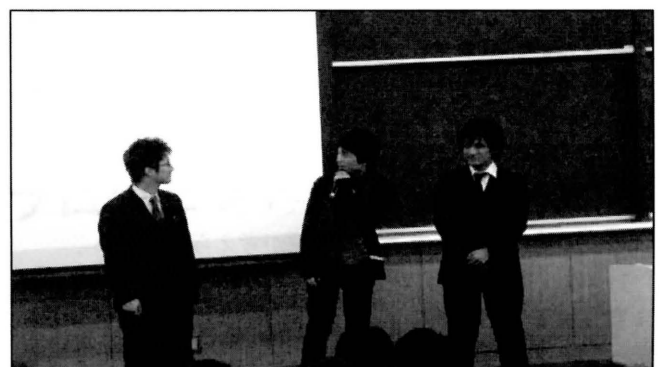


チラシ制作者：高橋 和美

・ 2007年度ベストプロジェクト

- 1位 SPACE ~光と音のインタラクティブ空間~
本江・鈴木プロジェクト
- 2位 R^col -歩くことを楽しませてくれる携帯端末の開発-
小林・飯田プロジェクト
- 3位 Image Graphy -映像認識による動きの可視化-
佐竹・津久井プロジェクト

・ 閉会式で挨拶するベストプロジェクトの代表者たち



6. 2007年度に起こった問題とその対応

6.1. 発表会場の決定

1. 9号館と10号館の違い

「3.1 2. 発表会場の決定」で記述したとおり、2007年度には10号館が建設され、発表会も10号館1階のアカデミー・モール、ゼミ室で行うことになった。10号館で発表会を行うことになった経緯は以下の通りである。

2006年度までは9号館5階のアトリウムとゼミ室で行われていた。アトリウムはかなり広く、建物の構造もとてもシンプルであるためブース設置も比較的に行うことができる。しかし校舎の真ん中であるため学内のみの発表会のように思われ、発表会の雰囲気を出しづらいデメリットがある。

一方、10号館の1階は天井が吹き抜けになっており、9号館に比べ明るさもあるため、発表会の雰囲気を盛り上げることができる。また外部からのアクセスも楽である。しかし建物が構造上複雑であるため、工夫をしてブースを設置していかなければいけない。

このような9号館で行うこと、10号館で行うことのメリット、デメリット、他にも10号館の1階は外部に向けての発表を行う場として「アカデミー・モール」と名づけられていること、そのアカデミー・モールで最初の発表をネットワーク情報学部が行うことで、学校全体が発表の場に利用するかもしれないという教務課の願い、これらのことを全て踏まえた結果、2007年度実行委員会は10号館で発表会を行うことを決断した。

2. ゼミ室を使用するプロジェクトの決定方法

「3.1 3. 各プロジェクトの発表場所の決定」で記述したとおり、ゼミ室を使用するプロジェクトを決定する会議を行った。ゼミ室を希望するプロジェクト数がゼミ室の数を上回ったことは過去になく、初めてのこととなった。

2007年度の実行委員は、「希望するプロジェクト同士の話し合い」でゼミ室を使用するプロジェクトを決定することにした。11月の中旬に話し合いの時間を設けた。

しかし実際に話し合いの場になってもどこのプロジェクトも譲らなかった。決まった経緯は省くが、結局はアカデミー・モールに広いスペースに用意をする、そして以前から使用するつもりはなかったゼミ室101Hを使用することで話はなんとかまとまった。

2007年度の「話し合い」の手段が最適だったかどうかは未だわからない。「話し合い」という手段は最も時間がかかり、普段からの実行委員会と各プロジェクトとのコミュニケーションが重要になってくる。ちなみに、「話し合い」の他にも以下のような手段が考えられた。

1つは「実行委員会が審査する」という手段である。ゼミ室を使用したいプロジェクト1つ1つに実際にプレゼンテーションを行ってもらい、そこで実行委員会がゼミ室を

使用するかしないかを判断する。しかしその場合、不可となったプロジェクトと実行委員の間に溝ができる可能性が高い。

もう1つは、「抽選」にするという手段である。2006年度はこのようなゼミ室を取り合いになる状況にはならなかったが、もしゼミ室を取り合いになった場合は「抽選」をする予定であった。これは最もシンプルで時間もかからないが、納得のいかないプロジェクトも出てくるだろう。

それらを考えると「話し合い」という手段をとった我々の判断は間違っていなかったと思うが、2008年度以降も毎年この問題については考えていってもらいたい。

またゼミ室101Hは他のゼミ室から少し隔離されていて、来客が入りづらいことは予想していた。今年度は仕方がなくゼミ室101Hを使用した。実際に使用してみると、多くの人がゼミ室の存在にすら気づくことがなく、やはり入りづらいことがわかった。それらのことを考えるとゼミ室101Hは使用するべきではなかった。

6.2. 各プロジェクトとの接し方

1. 各プロジェクトとの連絡

各プロジェクトへの連絡は全て実行委員会の4年生代表が行った。各プロジェクトへの連絡は主にメールを使用するため、最初はお互いの顔もわからない状態で準備をすすめていく。そのため複数の人物が連絡するより、実行委員の代表がメールでしっかりとコミュニケーションをとっておくことが、実行委員会全体の信頼につながる。

基本的には学部メールを使用するが、各プロジェクトの代表者とはいえ、メールチェックが習慣となっている人間は少ない。そのため中々連絡がとれないこともある。2007年度は「学部メールを推奨するが、確実に連絡がとれるメールアドレス」を申請していただいたが、もし可能であれば携帯電話の電話番号やメールアドレスも聞いておくと確実に連絡がとれると思われる。

また代表者やデモ会運営委員にだけ連絡していても3年生全体には連絡したことはない。そのために2007年度実行委員会は、代表者やデモ会運営委員に連絡した内容と同じものをサイボウズの掲示板に書き込んだ。またブログを作成し、実行委員会の活動の様子を書き記し公開していた。

ブログ <http://s3.ne.senshu-u.ac.jp/~project19/>

2. 代表者の意見はプロジェクトの意見である

実行委員会は各プロジェクトの代表者やデモ会運営委員の意見がそのプロジェクトの意見として受け取り、準備を行っていく。そのことを各プロジェクトに徹底しておくことが重要である。

2007年度に起きた問題として、実行委員の指示不足が

原因で、あるプロジェクトとトラブルになったことがあった。実行委員会としてはそのプロジェクトの代表者やデモ会運営委員が実行委員会の指示に納得してくれていたため、そのプロジェクトの全員が納得してくれていると思っていた。しかし実際はそうではなく、そのプロジェクト内の一部のメンバーに我々の話が伝わっておらず、結局こちらの指示を押し通す形となってしまった。

この問題の原因は我々実行委員会の調査不足により起こったものであるが、この問題に関わらず実行委員会は3年生全員の意見の取り入れることは不可能である。つまり、「代表者の意見はそのプロジェクトの意見である」ということを各プロジェクトに徹底しておくことで、トラブルを回避することができる。

7. 実行委員の活動を終えて得たこと

7.1. 「3ヶ月で一生涯ものを得た」

プロジェクト発表会実行委員会 2年次 高橋 和美

2年次に実行委員を経験していなかったら、私は最後まで委員会の存在を希薄にしか捉えていなかったかもしれない。プロジェクトに携わる以前は、プロジェクトは3年生のみのものという印象があったのだが、自らが委員になることで、プロジェクトは発表者、4年生、2年生、教務課の方、先生方、警備の方、来場者……と想像よりはるかに多くの人が入り込んでいるものだということがよく分かった。プロジェクトを作っているのは、見えている人だけじゃない。このことは発表者として参加する以上知っていなければならないことであり、今回身を持って経験したことは非常に大きな収穫となった。また、毎年あらゆる人が熱を注いで作り上げるプロジェクトにより深く関わられたことを光榮に思う。

私を含め4人の2年生は、メンバーの1人に誘われ自主的に集まった。始まりは、7月に行われた中間発表会の会場デザインをやりたい人はいないかという上平先生の授業内アナウンスがきっかけだった。本格的に委員として確約をし、役職をいただいたのは9月である。元々4人の仲は親しいほうであったが、プロジェクト発表会を成功させるという目標の元に共有した時間は、私たちの関係をより深めてくれたと思う。

このような発表会において、何事も起こらず進んでいくことはほぼ有り得ない。色々な場所で問題が起こり、それを乗り越えていく過程を含めたものが準備であると思っている。実は仕事を始めたばかりのころ、私はメンバーの1人と衝突をした。だが、相手が作ってくれたきっかけから腹を割って話をし、仲直りをしてからは、非常に良い関係を築くことができたと自負している。

委員会は2年生と4年生で構成される。2年生から見て4年生は憧れる部分もあり、今まで接したことのない先輩

方と関われることは嬉しかった。個人的なことだが、10月ころは3年生のスーツ姿や学校の張り紙を見て就職活動に非常に興味寄せており、不安にもなっていた。私が所属するコンテンツデザインコースには親しい4年生はいなかったため、少しでも話を聞くことができたのは大変貴重な経験であった。

実行委員になることで、自分の時間を削って会議をし、必要なものを作り、会場の設営・撤去をしていくことは負担になることも多少あった。特に、授業との課題が重なったときは大変になることが多かった。だが、代わりに得たものは私に一生根付く財産となった。

私が担当したポスターのデザインでは、大まかイメージは決めていたが、レイアウトや最終調整がしっくりこず、明け方まで先輩から訂正の指示を仰がせていただいた。毎回、的確なアドバイスを頂き、アイデアに感嘆していたのを今でも鮮明に記憶している。ポスターの制作にはイラストレータを使用した。今までは、ほとんど授業の課題でのみ使用していたソフトだったが、この機会に経験をつむことができ、個人的なスキルも上達した。また、今までポスターやパンフレットなどの紙媒体の制作物にはあまり興味は無かったのだが、プロジェクトのポスターを作ったことでレイアウトを考えることが面白いと思うようになった。もしかしたら、この仕事をしていなければ興味を持たないままであったかもしれないと思うと、とても大切な経験であったといえる。

また、ポスターはデザイン案をいくつか作り、4年生と2年生に見てもらった。課題以外で自分のアイデアを評価してもらうことは今までに無かったことだった。最初人前に出す時は、これでいいのかな？と不安もあれば、どんなリアクションをしてくれるのだろうか？と楽しみにもしていた。今回制作したポスターのデザイン案は、その場にいたメンバーには思っていたより好評ですごく嬉しかった。また、この気持ちはその後の自信や委員会での居場所につながっていったと思う。

そして、完成したポスターは駅や学校に貼られ、登下校の際にいつも見ることができた。上平先生にはあのポスター面白いねと言っていたが、栗芝先生には当日にポスターを振り返ってみている人がいたと教えていただいた。友人がポスター見たよ、頑張ってるねと応援してくれるのも嬉しかった。他人から、感想をもらえることは喜ばしいことで、特に先生からコメントをいただけるとは思っていなかった。ので歓喜した。

今回、プロジェクトを来場者としてしか経験していない2年生という立場での参加であった。委員を経験することで、今後発表者となる側として何が参考になったのだろうか。それは、プロジェクトについて深く知れたこととプロジェクトという存在に愛着が湧いたことではないだろうか。自分に関わることで発表者である3年生の懸命な姿をより近くで見続けることで、私も来年はこうやって頑張ら

ないとなあ、来場者の目を惹くような成果を出したいと思う気持ちが強くなった。なんとなくの存在だったプロジェクトが徐々に私の中で鮮明になっていった。

先ほど、トラブルは付きものという話をしたが、発表会前日の設営のときにも、あれこれと問題が出てきた。例えば、紙面上の設計図と実際ではイメージが合わず制作物が不足したり、至る所に使ったビニールテープはすぐ無くなってしまったり、ただでさえ手作業は時間がかかるので残量がなかなか減らず、最後には建物の電気が落ちてしまった。これ以上は当日の早朝にするしかなく、家で出来ることだけすることになったのだが、開催時刻までに間に合うのか皆心配であった。ここにも人間ドラマ……は言い過ぎだが見えない人の力があって、ぎりぎりまで作業して設営は完了した。実は、前日には数時間も作業を手伝ってくれた同級生がいて、当日も学校の近くに住んでいた同級生が朝から数人手伝いに来てくれた。本当に急に頼んだにも拘らず嫌な顔をせずに助けてくれたことに感謝する。大変なこともあったが、今は楽しかったという思いが一番強く残っていて、委員になって良かったと思っている。この糧を今後に生かし、大切にしていきたいと思う。

最後にこの場を借りて、実行委員としてプロジェクト2007に寄与できたことを大変嬉しく思うと共に、4年生の先輩方、諸先生方、教務課の方々、その他お世話になりました諸人に心から感謝申し上げる。

7.2. 「大学生活最後の仕事を振り返る」

プロジェクト発表会実行委員会 4年次 横山 敬之

1. 活動全体を通して

プロジェクト発表会実行委員会の仕事の依頼が私にきたとき、実は気軽な気持ちで引き受けた。自分ならできるという自信もあったし、3年生のときにコウサ展のスタッフを経験していた私としてはそれほど難しいものではないと思っていた。実際に発表会を終えた今でもそれほど大きな仕事をしたとは感じていない。しかしこの活動は大変貴重なものであり、良い経験になった。その中で勉強になったこと、発見したことを数点挙げたい。

2. 2年生との関わりで考えさせられたこと

私が実行委員の代表をやっていて常に考えていたことは、2年生の実行委員との関わり方であった。2年生の仕事は目に見える形で表れるため、クォリティの高いものが要求される。そしてそのためには時間と労力を必要とするため、2年生と全く関わりのない私では人選できない。

そこで2年生の実行委員はコンテンツデザインコースの先生方に人選していただくことにし、結果的に2年生は私たち4年生が思っていた以上の仕事をしてくれた。

私としては2年生の仕事の内容を考えると、2年生のモチベーションの向上と維持が重要と考え、コミュニケー

ションをしっかりととることが大切と判断し、1週間に1度は何らかの理由をつけて集まってもらい、話をするようにしていた。その成果もあって私は指示が出しやすく、2年生も何をすればいいのかがわかりやすく良かったと思う。発表会が終わってからも良い縦の関係が続いていることから、2年生とのコミュニケーションは上手くいったと安心している。

しかし逆に反省点もある。それはスケジュールの調整や仕事の分担も主に私が決めてしまったことである。2006年度の実行委員会では4年生と2年生はあまり交流がなかったらしいが、その分2年生は発表会を成功させるためにはどうしたらいいかをよく考えたのではないだろうか。もちろん2007年度の2年生が何も考えなかったわけではないし、私としては完璧な仕事をしてくれたと感謝している。ただ私としては、2年生にもう少し考える時間を与えてあげていたほうが2年生のためになったのではないかと考えている。

発表会が終わっても私の2年生との接し方がよかったのかどうかはわからない。もしかしたら今の2年生の実行委員が4年生になり、その中の誰かが今度は4年生としてまた再び実行委員会をやるとなったときに、後輩になる2年生とどう接するかによって私の接し方が正しかったかがわかる気がする。

3. ネットワーク情報学部のつながりを発見した

発表会の裏側の仕事をする中でわかったことがある。それは「ネットワーク情報学部に関わる人間は何かを支えられ、何かを支えている」ということである。発表会を行う3年生は我々実行委員会や担当の先生方に何らかの形で支えられ、実行委員は教務課のあらゆる手配や調査、ノウハウに支えられ、先生方も教務課に支えられている。教務課は発表会に来てくださった来客に専修大学をアピールする。そういった意味では教務課は3年生(学生)に支えられている。このまるで円を描くような関係は、実行委員でなければ気付くことができなかったと思う。教務課の方には大変お世話になり、心から感謝したい。

発表会が終わってから私の同級生(4年生)に、「プロジェクト発表会の準備をしていた」と説明してもほとんどの人が実行委員会の存在を知らない。つまり発表をする3年生の多くは発表会の裏側でどのような人たちが動いているのかをわかっていない。それどころか発表会があることが当然のように思っている。実行委員会を知らないとなればさらに裏側の役割をしてくださった教務課の存在には気づくことができない。もちろん我々や教務課が「感謝されたい」という気持ちではやってはいないし、むしろやってはいけない。ただ、発表する3年生が支えてくれる人への感謝の気持ちを持つことで、さらに力の入った作品、プレゼンテーションにつながるのではないかと私は思う。だからこそ来年度以降発表する3年生にはそのような支えとなっている

人たちのことも意識して発表を行ってほしい。

4. 楽しめたことで自分に自信をもつことができた

私はこれまでの人生で多くの「リーダー」と呼ばれるものを経験し、自分の力を磨いてきたつもりであった。しかしどのようなリーダーをやっても終わったときに「自分がリーダーをして正しかった」と思うことはなかった。その仕事をしているときは学ぶことも多かったが、メンバーがついてこなかったり、自分だけが空回りしていたりすることが多く、常に反省をしていた。

しかし今回のプロジェクト発表会実行委員会の代表を終えてははっきりと「自分がやってよかった」と思えることができた。もちろん反省点はたくさんあるし、周りの人から見ればまだまだ足りない部分もあったと思う。しかし何より実行委員のメンバーという時間がこれまでの大学生活にないほどに楽しく、実行委員も自分についてきてくれた。きっとそれは自分が思い描くようなメンバーで、しっかりとコミュニケーションもとれ、発表者の3年生とも信頼関係を築くことができたからであろうと思う。それは今後社会に出ていく自分の自信につながり、大学生活で残してきたプロジェクトや卒業制作の成果物より自分の痕跡を残せたと思う。

5. 最後に・・・

そして私は、来年度の実行委員会のために「プロジェクト発表会実行委員会マニュアル」を作成した。今後発表会がどのように進化していくかわからないが、その進化に少しでも役に立てればと思いマニュアルを作成した。私たちが踏み出した10号館での発表会のはじめの一步に誇りを持ち、そして決して無駄にはならないことを願いながら次の実行委員にバトンタッチしたい。